

特集

2030年札幌冬季五輪招致概

50年前の札幌冬季 あの興奮と感動を週

要決まる!

五輪 雑誌から見る



さまざまな問題を孕んだまま、コロナ禍のなか強行された東京五輪。舞台裏のダイテイナー部分が露見したこともあり、札幌市は2030年冬季五輪の招致を正式に決定したが、市民の熱は一向に盛り上がらない。しかし、50年前の札幌冬季五輪は、紛れもなく北海道

のみならず国を挙げての一大イベントであった。地下鉄、地下街が誕生するなど、札幌の街並みを大きく変える契機にもなった札幌冬季五輪を、1972（昭和47）年1月の週刊誌誌面から振り返ってみよう。

（フリーライター・内海達志）

札幌五輪は発車オーライ

札幌の街が現代的に変貌した最も大きな要因は、地下鉄の登場だろう。五輪開幕に先がけて、南北線の北24条―真駒内間が1971（昭和46）年12月16日に開業した。21日号の「週刊朝日」は、「雪の下にもオリンピックの鼓動」と題した巻頭のグラビア特集とともに、記者の乗車体験記を載せている。

札幌の街が現代的に変貌した最も大きな要因は、タクシー運転手に「どこか名所へ案内して」と告げたところ、連れていかれたのは、なんと札幌市役所の新庁舎だった。19階建て、地上85メートル。当時の札幌で一番の高層ビルであった。

ちよっとしたものだよ」と言葉を続けた。地下街のポールタウンとオーロラタウンがオープンしたのは1971年11月。寒い札幌とあって、完全に人流の動線は変わり、各店舗は絶好調であった。〈初め、「六十億から百億」と胸算用、自信なさそうな小声で売上げ目標を言っていた地下街商店街も、いまでは「百億は軽くいく」と自信をみせる〉「おさまらないのは狸小路の商店。それだけでなく、このところ本州のデパートや専門店の支店に押され気味だったのである」

開通により再び人流は変わったのだが、これは道産子の「地下好き」を物語っているといえよう。

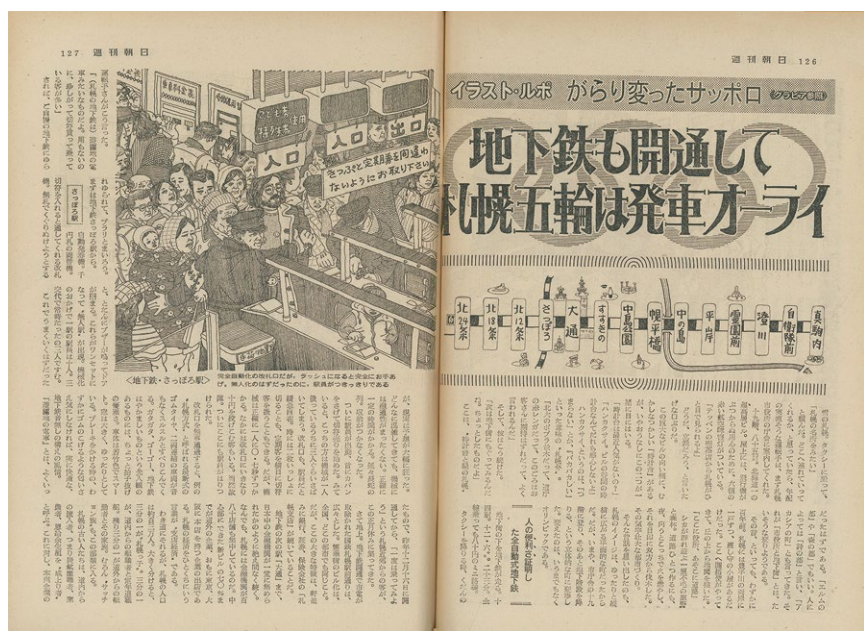
ちい三人ぐらいきさばいてしまう〉改札口も、駅員だと緩急自在。時には二枚いっしょに切れることも、定期客を横目に切符客を扱うこともできる。なかには改

札口にいきなり十円を投げ込む客もいる、当然故障。ついにここにも駅員がはりつけられた。——という光景であった。

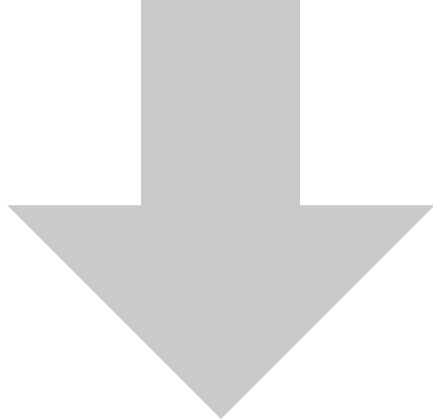
ただ、地下街が整備された一方で道路の舗装は追いついておらず、

乗客が自動券売機、

で目撃したのは、へどんなに混雑してきても、機械には融通性がまったくない。延々長蛇の列。収拾がつかなくなった。ついに駅員が出動、首にカバンをさげて切符を売り始めた。こっちは機械が一人扱っているう



▲「週刊朝日」1月21日号



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)